

郎のつきりす。團七兵衛は長九郎左衛門が臣小林平左衛門が首を取る。七兵衛二十歳許にて、初高名にて嬉敷く、家來は不參自身首を提げ小松へ歸る。孫三郎は深手負て家來に問ふは、我等鎗付たる敵の首は誰取たと云。團七兵衛殿御取と答ふ。孫三郎それ取還せと云。若黨三人七兵衛を追掛け、もとをりの八幡の前にて追付、七兵衛何心もなく行處に三人にて取籠む。七兵衛中々首を不放、上を下へと組合ふ。小松衆多く出合ひ、是は何事ぞと問へども耳へも不聞入組合けるに、終に首は三人の方へ取り、冑は七兵衛持て居る。七兵衛刀・脇差をも三人して取たり。何も是は理不盡の沙汰也。以後穿議成間敷事に非ずとて、首も刀・脇刺も七兵衛へ相渡す。後日此穿議大に成て、様々證據を引けども、何れとも批判不落着。其頃小松にての沙汰は、孫三郎は四十歳許にて、福富平左衛門小姓立にて場敷も有之、祿も八百石にて使番を勤む。七兵衛は二十歳許にて小身者、殊に初陣也。たとひ孫三郎手付たるに極りたりとも、おとなしくとらせて似合しく見事ならん。況哉しかと仕たる證據なければこそ、批判も不落着といへり。然れども瑞龍公へ孫三郎

を四千石に被召抱、先主富田信濃守より斷にて召還しぬ。瑞龍公被遣間敷とありけれども、あなたも四千石にて家老に仕度との儀、孫三郎も故主なれば參申度とて歸參す。瑞田如
一、越中蓮沼の燒討
天正十三年二月廿五日、越中蓮沼を村井又兵衛燒働の時、老弱男女不殘撫切にすべしと也。怪い哉二十五日の朝何方ともなく、蓮沼にて賀州より敵來とて、上を下へとさわぎふためきぬれども、眞偽不慥候處、其夜如案敵襲來りて三百餘人切殺さる。朝よりの雜説なくんば千人も可被殺と越中の老人話。
一、横山山城、種村三郎兵衛の若黨を斬る
朝鮮陣の時、高德公御父子名護屋に御在留の處、横山山城兄因幡と致同道他行す。因幡は三十間許先へ行處に、若黨体一人因幡の馬の側を摺通り候。其時馬の蹴あげかゝりぬ。立戻て散々に悪口を吐く。因幡も乘戻し、何者なれば左様にいふと尋る所へ、山城も來て何事と云。山城聞て、誰人の家來かはしらねども、當家中の者と見たり。慮外者也とて打擲す。翌日種村三郎四郎より使者を以て、昨日我等家來途中に

て致慮外、御打擲被成候旨、御尤に存候。則其者は暇遣し候間、其御心得可被成と也。昨日途中にて慮外者有之に付致打擲候處、其方御家來の旨。依之御扶持被放候よし得其意候旨返答す。其後程を経て山城御本陣夜詰に、宿へ近く歸る時分、同輩二三人も草履取一人宛にて同道し、山城は小用を調べ、其外は猶宿近く立別れぬ。然處山城が後より何者ともなく一刀きる。右の肩より筋違にみつがらみの邊迄、切先はぐれに切りぬ。山城拔合せ、我も數ヶ所手負、彼者にも數ヶ所手負せたり。山城は深手に付倒れぬ。それを見て死たると思ひ立退く。山城はまだ死なぬぞ卑怯者め、とゞめを指せよと呼びぬ。心得たりと立歸る所を、起様に横に拂ふ。彼者の兩股切て落しぬ。倒るゝ時押懸てとゞめを指しぬ。草履取は喧嘩よと告げに往く。各駈寄り見れば夥敷疵也。中々本復は思ひもよらぬ体なれ共、元氣正敷に付て、療治を加へければ程なく本復す。瑞龍公甚だ御喜悅、其時五千石御加増にて、先知共に七千五百石に成る。後に聞は種村若黨打擲の晚、三郎四郎へ申けるは、今日不慮の仕合にて横山山城に打擲せられ、男は成不申候。御暇可被下候云ふ。

一段尤とて刀をとらせけると也。
一、山崎閑齋、上坂又兵衛を窘む
淺井暖の時、瑞龍公三堂山より本郷村の上の山へ御駈付被成、侍大將列居の所にて、扱も各は腰拔共哉。松任にての談合は是也。あはれ小松より出よ、出たらば其敵を引付附入にすべしとかたく申合たるは、各失念かと御怒也。諸將兎角の御請なし。其時上坂又兵衛進出で、さればこそ申さぬか、我等附可申と申たるにと云。山崎閑齋又兵衛に向ひ、其方は手筒山の事を忘れたるか。其方など何を知てと申ければ又兵衛無答。手筒山の事聞度と云。
一、北川久兵衛・不破加兵衛の働
大坂夏陣に藤堂泉州の手へ北川久兵衛・不破加兵衛兩使被遣候。泉州先手一戦始る。兩人とも働て手負て首を捕、泉州へ披露し扱此方へ持參しぬ。其後泉州被申候は、兩人共扱々見事成働也。但首を我等方に置たらば、我等書狀差添肥前殿へ可遣。然らば彌様子可宜。首を取て行たるは若氣故也と被申候。
一、微妙公、井伊侯へ威言